福島県立相馬高等学校　2021.3.30

校長通信

Sincerity

Vol.12
最終号

校長　菊田勇雄

一椀にひろがる野の香蕗の薹

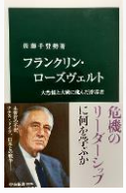
大久保静幸

先日、我が家の夕食に蕗の薹の天麩羅が並びました。私の大好物です。家内がスーパーの店頭に並んでいるのを見つけ、早速、調理してくれました。その日はうどんを茹で、かき揚げと一緒にのせて食べました。独特の苦みと香りが口一杯に広がり、春の到来を感じる幸福な時間となりました。相馬に戻ってから事務の優子さんにそのことを話すと、蕗味噌を作ったので持ってきましょうかと有り難い申し出がありました。断る理由などあろうはずがありません。二つ返事でいただきました。蕗の薹の苦みが味噌と溶け合って何とも言えない風味です。白いご飯にのせたり、お味噌汁に少量加えたりして春を堪能しました。蕗の薹にはビタミンEが多く含まれ、細胞の老化に効き目がある一方、食べ過ぎは良くないとのこと。くれぐれも注意しながら季節を味わいたいと思います。

前期選抜合格発表

３月15日正午、快晴の空のもと令和３年度前期選抜の合格発表が行われました。合格した普通科108名、理数科40名の皆さん、おめでとうございます。皆さんには今日の喜びを忘れず、入学後は自分の夢や目標を実現するため、学業や部活動に精一杯取り組み、充実した高校生活を送ってくれることを期待しています。なお、26日にはオリエンテーションが行われ、学習、学校生活、事務手続き等について説明をしました。

おすすめ書籍



佐藤千登勢著『フランクリン・ローズヴェルト 大恐慌と大戦に挑んだ指導者』（中公新書）

本書は第32代アメリカ合衆国大統領フランクリン・デラノ・ローズヴェルトの評伝です。サブタイにあるようにローズヴェルトは、世界大恐慌と第二次世界大戦という未曾有の危機に立ち向かい、国内外の政治を牽引した大統領としてその名が知られています。特に印象深いのはそのリーダーシップのあり様です。自分の信念にもとづき素早く政策を遂行した点や、ラジオによる「炉辺談話」を通じて国民の信頼を勝ち取った点は、リーダーのあるべき姿を示しています。また、39歳でポリオに罹患し下半身不随になりましたが、病気の進行からくる苦悩や恐怖を克服し政界に復帰した姿は、知られてこなかった彼の実像を伝えています。リーダーの本領が発揮されるのは危機においてである。まさにそのことを実感する内容であり、リーダー必読の書と言えるでしょう。

聖火リレー出発式に和太鼓・吹奏楽部が参加

3月25日、19時30分から東京オリンピックの聖火リレーを紹介するNHKの特別番組が放送され、本校の和太鼓部の演奏が生中継されました。26日には中村神社で聖火リレー出発式が行われ、和太鼓部が演奏を披露しました。ゴール地点の相馬駅前では本校と相馬東高校の吹奏楽部が合同で演奏を披露しました。また、本校１年の佐藤佑樹君がサポートランナーを務め、翌27日には本校２年の林大輔君が郡山市内を走る第７区間の聖火ランナーを務めました。様々な形で聖火リレーに貢献した３日間でした。

二度の大地震を乗り越えた本校の講堂について

３月１日、令和２年度の卒業証書授与式が挙行され、愛する若駒たち155名が学び舎を巣立って行きました。例年、卒業式は第一体育館で行われますが、去る２月13日に発生した福島県沖を震源とする地震により、二つある体育館がいずれも使用できなくなったため、急遽、講堂に会場を変更しました。改めて講堂について考えてみたいと思います。

本校講堂は、創立35周年記念事業として昭和８（1933）年８月に起工し、11月に完成した木造平屋建ての近代洋風建築です。当時は旧制相馬中学の時代。長年、学校関係者の多くが、その完成を待ち望んでいました。12月には記念式典と講堂落成式が開催され、学校は喜びに包まれました。卒業生を代表し志賀清身（第一回生）は、祝詞の中で次のように述べています。

「今次落成せる母校の講堂よ。ああそれ母校の講堂よ。吾人は静かに過去労苦の跡を顧み、今この宏壮なる講堂に臨む時、歓喜万感胸に迫りて言う所を知らず。」

また、第12代校長羽曽部千代八が、式辞の中で「常ニ最モ緊要ナル講堂」と言及したように、講堂は主要な行事が行われる場所として学校の中心的な建物になっていきました。

その後、昭和42（1967）年にステージ部分が増築され、平成元（1989）年から３年にわたって外壁補修が行われました。さらに耐震工事が計画されていましたが、工事に取り掛かる直前の平成23（2011）年３月、東日本大震災に遭遇しました。幸いにも大きな被害はなく、平成24（2012）年から約５年をかけて耐震補強工事が施されました。そして、平成30（2018）年に創立120周年の記念の年にあたり、文化庁より登録有形文化財に登録されました。すでに耐震工事を終えていたおかげで、講堂は先日の震度６強の揺れにも堪え、最小限の被害で済みました。つまり、講堂は二度の大きな地震を乗り越えたと言えるでしょう。

明朗な佇まいの講堂は、試練を克服した人間の凜とした姿に重なるとともに、その姿は私たちに勇気と希望を与えてくれているようです。

正門を入ると、左手には講堂本体の大きな切妻屋根と、玄関の小さな切妻屋根が見えます。視線を右に移すと、視界には馬城会館、校舎、音楽室が入ってきます。さらに右を見渡せば、プロムナード、グラウンド、ロータリの老松、枝垂れ桜が見えてきます。異動にあたり私はこの光景を目に焼き付けたいと思います。

アクティブラーニング公開授業並びに校内研究授業が行われました

授業者
【古　典】鈴木千尋先生、川岸沙綾先生
【数学Ⅰ】伏見裕樹先生、白岩正伊先生
【数学Ⅱ】関　雄太先生
【物　理】松岡浩三先生

３月８日、アクティブラーニング公開授業が行われました。５校時目に国語と数学の授業、６校時目に研究協議がありました。国語の古典では孟子の性善説と荀子の性悪説の違いについて、グループごとに考え、まとめる活動が行われました。数学Ⅰではデーター分析に関する問題をグループで考え、解き方を説明する活動が行われ、数学Ⅱではグループごとに微分の考え方を用いて様々な問題を解き、説明する活動が行われました。どの授業もグループ活動の利点を生かし、ワークシートやホワイトボードを有効に活用しながら、学習内容の理解を図り、課題について思考を深める授業でした。また、３月10日には物理の校内研究授業があり、単振動の周期の公式を活用し、物体の質量を演示実験で求める活動が行われました。松岡先生自作の「宇宙体重計」によりレンガの質量を測定するなど工夫が随所に見られた授業でした。担当された先生方お疲れ様でした。今後も授業改善のファシリテーターとなることを期待しています。

理数科課題研究発表会

３月17日、理数科課題研究発表会が開催されました。２年理数科が一年間研究した課題研究の内容と、理数科生徒の校外活動の成果を発表しました。また、ポスター発表も行われました。活発な質疑応答もあり有意義な発表会となりました。１年理数科の生徒は、先輩達の発表に熱心に耳を傾けるとともに、次年度の課題研究に思いを馳せていました。今年度の主な研究テーマは下記のとおりです。

【研究発表】
「段ボールによる防音効果の研究」
「ドローンを用いた高低差による温度変化の調査」
「ミジンコの不思議～その驚くべき生態～」
「学校内外のコミュニティという選択」
「ルビーの合成」「視覚と運動神経の関係」
「液状化現象の対策」「イケメンの黄金比」
「弦の定常波を利用したgの測定」

【ポスター発表】
「運動能力と脈拍数の関係」「清涼飲料水が与える体への影響」「カタツムリの能力と生態系」など

１学年進路ガイダンス

３月18日、１学年進路ガイダンスが開催されました。まず、講堂で全体向けの進路講演会が行われ、生徒は進路選択のポイントについて話を聴きました。その後、各教室で分野別ガイダンスが行われ、生徒たちは熱心に説明に耳を傾けていました。国公立大学、私立大学、短大、専門学校等から15名を超える講師をお招きするとともに、オンラインで講師が参加した学校も多数ありました。春休みを前にして生徒諸君が進路意識を高めてくれることを期待しています。

「はいろのいろは」共創ワークショップ

３月16日、原子力損害賠償・廃炉等支援機構主催の標記ワークショップが開催され、２年４組理数科の生徒諸君が参加しました。ファシリテーターとして立命館大学准教授の開沼博先生もオンラインで参加しました。アイスブレイキングの後、グループごとに「デブリの取り出し」「汚染水の問題」「地域の復興」「風評被害対策」等のテーマについて、参加者や講師との対話を重ねながら、課題解決に向けた提案を行いました。講師の東京電力社員や地域復興に携わる方々からさまざまなアドバイスがあり、最後に開沼先生から講評をいただきました。

同窓生列伝㉓折笠晴秀（1885-1965）最終回　～格調高き答辞と幻の馬城会報～

同窓生列伝は今回で最終回です。「列伝」と称しながら、結局、折笠一人の生涯を辿ることになりました。調査していくと、折笠の足跡を伝える資料が断片的に見つかり、それをつなぎ合わせることで、人物像が輪郭を持って立ち現れてくる楽しさに引き込まれていきました。

相馬ホールのOBラウンジにあるガラスケースには、明治36年３月30日に挙行された旧制相馬中学第一回卒業式において、卒業生総代の折笠が読んだ答辞が展示されています。その格調高い文章からは、これから世に出て学問を究め、国家の発展に寄与しようとする固い決意が伝わってきます。それは藩閥による専制政治が強固であった当時にあって、東北人の気概を鼓舞し、自らの志を述べるものでした。

「生等今吾校卒業生ノ嚆矢タルヲ得ルト共ニ、又其責任ノ甚タ重大ナルヲ思ヘハ、実ニ慄然トシテ心寒ク慄然トシテ身戦カサルヲ得ス。然リト雖トモ難ニ臨ンテ苟モ避ケス、奮然勇往斃レテ後止ムハ是レ男子ノ本領ナリ。(中略)希クハ邁往勇進私ヲ捨テ公ニ殉ヒ王トナリテ砕ケムノミ、何ゾ瓦ノ全キヲ望マムヤ」

その後、折笠は旧制一高、東京帝国大学を経て医学の道に進み、順天堂医院、阿久津医院で臨床経験を積みました。やがて開業した折笠は泌尿器科の名医として知られるようになりました。また、戦後は秩父宮雍仁親王の侍医団に加わり、腎臓剔出手術を執刀しています。

故郷や母校を想う気持ちの強かった折笠は、旧相馬藩領出身者で結成された相馬郷友会との繋がりを大切にし、会誌「相馬郷」には常に自分の消息を伝えました。また、京浜地区で活躍する相馬中学同窓生による京浜馬城会の中心メンバーとなり設立に深く関わりました。昭和14年から24年まで終戦をはさんで馬城会本部の会長も務めました。会長の時代の業績はすでに紹介済みですが、その一つ『馬城会報』の発刊は第４号を数えました。折笠会長時代の『会報』は散逸し、今は見ることができませんが、もし発見されれば、戦前の馬城会の活動を知る貴重な資料となるでしょう。折笠は会長として何を思い、どのように行動したのか。それを知る手掛かりになることは間違いありません。幻の『会報』がいつか発見されることを願っています。

昭和40年３月３日、折笠は80年の波乱に満ちた生涯を閉じました。それは明治・大正・昭和の激動の時代を駆け抜けた人生でした。現在、折笠は南相馬市小高区にある同慶寺に眠っています。戒名は「凌雲院秀岳黙照清居士」。誰よりも秀でた学識を持ち、自らの使命を黙々と果たした折笠にふさわしい戒名だと思います。また、この寺は相馬家累代の墓所であり、旧藩主家を敬っていた折笠にふさわしい場所だと言えるでしょう。東北の僻村から上京して学問を修め、医師として名を成す一方、母校の発展に尽くした折笠の生涯を通じて本校の歴史を辿る旅も終わりです。これまで読んでくださった皆さんに感謝の気持ちを伝え、筆を置くことにします。

左は同慶寺本堂　右は折笠が眠る墓